

## 芸術と平和教育

奥本 京子

### 1. はじめに

「平和」とは、暴力の削減・不在（消極的平和）と平和の構築・存在（積極的平和）の両面を包括する概念であるとするならば、「平和教育」とは、平和の意味を理解し、価値を尊重し、具現化するための教育と位置付けることができる。本項目では、芸術は平和教育の過程に、如何に関わるのかを課題とする。

消極的平和を具現化するとは、すなわち、直接的暴力を除去・低減することと、構造的暴力を可視化し問題化すること、また、文化的暴力を否定することなどを指す。例えば、軍事化・軍事主義・戦争を主軸とした平和教育、また、差別の構造・環境問題・貧困格差問題などについての平和教育は、消極的平和の実現にとって重要であろう。それは、社会・世界における各事象におけるいくつかの側面——直接的暴力、構造的暴力、そして文化的暴力——のそれぞれのあり方に、焦点を当てることによって可能となる。そして、上記の各種暴力は別個に存在するものではなく、連関して存在するものであることを、学習者はつぶさに分析し、その関係性を批判的に検証することが重要である。

積極的平和を具現化するとは、すなわち、直接的・構造的・文化的平和の質を高め、量的にも多くの実践を進めていくことに他ならない。特に、平和の「構築」との意味は、動態的行為であり、それは「過程」志向なのである。例えば、紛争解決・調停・和解・非暴力直接行動などを主軸とした学びを基盤とした平和教育が、それに当たると言えよう。それは、社会・世界における各事象についてのいくつかの側面——直接的平和、構造的平和、そして文化的平和——のそれぞれのあり方に焦点を当てることによって可能となる。これもまた、上記の各種平和は別個に存在するものではなく、連関して存在するものであるから、学習者はその関係性をつぶさに分析し、そこからさらに発展させる必要があるのだ。

本項目では、平和／暴力の関係の類型化を基盤に、平和と芸術の関係を分析することとする。その際、理論的には、次のことが言える。直接的平和を具現化するとは、直接的平和を構築することと同時に、直接的暴力を削減することであり、構造的平和を具現化するとは、構造的平和を構築することと同時に、構造的暴力を削減することであり、文化的平和を具現化するとは、文化的平和を構築することと同時に、文化的暴力を削減することである。

さて、平和そして平和教育に、芸術が関与する場合について、考察することにする。暴力の「削減」においても、平和の「構築」においても、そこには、極めて動的（ダイナミック）な作業が必要になる。そういった作業を推進する平和教育と、芸術という動的な行為・現象とは、親和性が高いと容易に推定できよう。すなわち、芸術というアプローチを用いて動的平和の創造の過程を作り出すことは、必然であると言っても過言ではないだろう。

## 2. 平和を創出する芸術

平和と芸術の関係を類型化しておく。<sup>1</sup>「平和を創出する芸術」を二種類に分ければ、第一は、「直接的・構造的平和としての芸術」であり、第二は、「文化的平和としての芸術」である。前者は、芸術それ自身が直接的・構造的平和として作用する（直接的暴力・構造的暴力を否定し、直接的平和・構造的平和を創出する）場合である。後者は、芸術が直接的・構造的平和を正当化する（文化的暴力を否定し、文化的平和を創出する）機能を果たす。

第一（直接的・構造的平和としての芸術）は、文化的現象としての芸術それ自身が、直接的・構造的平和としての機能を持つ。この種の芸術には芸術家による意図が強く介在していることが多く、平和的メッセージ性が高い。芸術作品において、直接的行為としての平和が具現化しているのである。例えば、平和行進（ピースウォーク）や反戦・反基地デモなどの平和活動の現場において活用されている、政治的な歌や舞踊などが挙げられるだろう。そこでは、具体的な戦争という直接的・構造的暴力を批判対象とし、平和を祈念する要素が見てとれる。

第二（文化的平和としての芸術）は、社会における直接的・構造的平和を正当化する。消極的平和の視座からは文化的暴力に対して批判的であり、積極的平和の視座からは文化的平和に好意的である。例えば、ジョン・レノンの歌『イマジン』やパブロ・ピカソの絵画『ゲルニカ』は、反戦思想から生まれ、直接的平和として表現された芸術作品であり、反戦平和運動の歴史の中で活用され社会に浸透することによって、構造的平和を構築してきた側面もある。学校教育において平和や反戦の価値を肯定的に捉え、これらを教材として組み込まれることも少なくない。しかし、これらの作品の第一義的な意義は、文化的平和として直接的平和（愛や共感共苦の実践）や構造的平和（憲法9条に代表される社会構造）を正当化していることにあるとも言えるだろう。

## 3. 紛争が顕現する芸術

「平和を創出する芸術」の中でも「紛争が顕現する芸術」は、平和のメッセージの直接的な送信に焦点を当てるものではなく、コンフリクト（紛争・対立・葛藤）を明示し際立たせ、人々にその存在を認識させる役割を持つものと位置づけられる。ここでの「紛争・コンフリクト」とは、人間社会・関係性における自然でエネルギーに満ちた摩擦・齟齬としての現象を指し、平和紛争学ではこれを、関係性の構築・修復に向けた貴重な契機と理解するものである。芸術が、社会の中に潜在するコンフリクトを顕在化させ、その構造を暴き出す。そうして、鑑賞者の中に潜在的な紛争転換の行為を創り出すのである。「コンフリクト」概念が導入されることで、より動的なコンフリクトの平和的転換の過程の意義が生まれ、芸術を介在させることで、その過程に関わる人々は、既存の国際政治の言説の枠組みの中に留まるのではなく、新しく自由に思考・行動できるようになる。

こうした紛争が顕現する芸術とは、平和の価値に根差したメッセージを前面に押し出すことを第一の目的とするのではなく、社会・世界へ問題の所在を明らかにするための問いかけ（対話）を試みる。コンフリクトを顕在化することによって、鑑賞する側にその次の行為を迫るので、「結果として平和を創出する芸術」と言えるかもしれない。顕現されたコンフリクトに焦点を当て分析し、それを如何に扱うか思考し、平和的転換を行動に移すことが可能となる環境とは、文化的平和を意味している。文化的平和はその他の種類の平和を正当化し創出する役割を担う。そうして創造された直接的・構造的平和は、それ自身の存在により循環して文化的平和をさらに強めていく。やはり、「紛争が顕現する芸術」とは「平和を創出する芸術」である。

なお、注意せねばならないのは、「暴力を助長する芸術」である。その第一は、「直接的・構造的暴力としての芸術」であり、第二は、「文化的暴力としての芸術」である。前者は、芸術それ自体が直接的・構造的暴力となって作用する場合を指す。後者は、芸術が社会において生起する直接的・構造的暴力を正当化する機能を担う場合を指す。前者は、政治権力などに利用される芸術を指す。芸術それ自体が直接的または構造的暴力性を持ち、人や社会に作用する。例えば、ナチス政権は、ユダヤ人やロマの人々などの排斥のために巨額の文化予算を組み、プロパガンダ芸術を駆使・利用して、社会的少数者の抹殺という直接的暴力に役立たせた。これは、芸術それ自体が「武器」としての側面を持ちえることを示している。すなわち、ある一定の暴力の手段として動員された芸術それ自体が、直接的暴力としての属性を獲得するのである。ここでの芸術の役割は、鑑賞者に対して一つの暴力として直接的に作用することである。次に、後者の「文化的暴力としての芸術」は、芸術それ自体が直接的・構造的暴力として機能することはないが、文化的暴力として、社会における構造的暴力や直接的暴力を正当化するという機能を持つ。芸術が暴力全般を許容する社会を作り出すのである。<sup>2</sup>

#### 4. 平和教育・トレーニングとしての芸術活動

暴力を助長するのではなく、平和を創造する、特に紛争を顕現させるためには、芸術は、平和教育と如何なる関係性を築けるか。まずは、具体例を挙げよう。「ルカサ」と名付けられたワークショップでは、数名の参加者が1つのグループを形成し、模造紙の上に共同で図画工作の作業を行いながら、想像するコミュニティにおける人々の関係性を構築していく。そして、関係性に内在するコンフリクトを分析し、「事件」が起こった後に、紛争転換の発想を用いながら関係性を（再）構築するという芸術アプローチである。

二つ目の例は、「サモアン・サークル・プロセス」や「ホーポノポノ」の方法論を応用して、ワークショップ参加者が数名から数十名集い、歴史コンフリクトなどを題材に、ロールプレイ的要素を取り入れて、それぞれの歴史的な役を「演じる」。その時代のその当事者の立場に立ってみることで共感を得ることにつながり、自分自身がその状況に存在したとしたら、どう行動・発言したであろうかを想像・体感し、コンフリクトの理解と転換に挑

んでみる。この方法は、演劇的要素の濃い芸術アプローチであるが、対話の過程や和解の手法を取り入れている。

演劇アプローチと言えば、よく知られているのは、アウグスト・ボアールによる「フォーラム・シアター」やジョナサン・フォックスによる「プレイバック・シアター」であろう。関連して、心理療法的アプローチと演劇的要素が統合された、ジェイコブ・L・モレノによる「サイコ・ドラマ」、ルネー・エムナーによる「ドラマ・セラピー」なども、トラウマ性が高い現場において活用されている。

このように、平和教育・トレーニングの現場で応用される手法には、他にも、芸術的要素を絡めたものがある。アーノルド／エイミー・ミンデルによる「プロセスワーク」は、芸術アプローチに親和性が高い。また、自己と他者の心身に共感し共働するという側面からは、マーシャル・B・ローゼンバーグの「非暴力コミュニケーション」や、ヨハン・ガルトゥングの「トランセンド・メソッド」などは、大きく概観して、動的平和の創造を担う動的芸術（紛争が顕現する芸術）のエッセンスを深く内包していると解釈することもできよう。すなわち、芸術アプローチとは、可視化・具現化された芸術を活用するといった狭義を超えて、芸術的すなわち「人・社会を深く広く識ること」との広義の立場から、平和創造・平和教育に活かされるべきなのである。

これらの芸術アプローチは、実際に、平和教育・トレーニングの場において活用されている。例えば、NARPI（東北アジア地域平和構築インスティテュート、ナルピと呼ぶ、<http://narpi.net/>）やMPI（ミンダナオ平和構築インスティテュート、<https://www.mpiasia.net/>）では、「コミュニティを基盤とした平和構築における芸術アプローチ」「歴史的・文化的な平和のもの語り」「平和構築のための芸術ともの語り：私たちの歴史を公正に表象する」「平和構築における応用演劇」といったトレーニング・コースが提供され、コンフリクトを転換し平和を創造するための多岐にわたる芸術アプローチを用いながら、実践的な平和のトレーニングが行われてきた。

芸術アプローチによって実施される平和教育・トレーニングとは、平和題材に関する知識の習得はもとより、平和的態度や技能の形成に重点を置く。芸術のあり方——すなわち二元論を超えて自由な感性を育み、自由に思考・行動する人間のあり方を模索すること——は、責任ある社会・世界に生きる市民として、共感・非暴力・創造性を通じて、他者と共に、関係性を構築・修復することを目指す過程と方向性を可能にするであろう。そうした「市民芸術家」を養成することこそが、平和教育の一つの大きな仕事ではないだろうか。

## 注

- 1 奥本京子『平和ワークにおける芸術アプローチの可能性：ガルトゥングによる朗読劇 Ho' o Pono Pono: Pax Pacifica からの考察』第2章、法律文化社、2012に依拠する。
- 2 ここまでの議論は、奥本『平和ワークにおける芸術アプローチの可能性』に依る。